A. Itad:dra ni, suguru tsukihi wa, ou keredo;
hana mite kurasu, haru zo sukunaki.

B. Hana mo mina, chiri nuru yado wa, yuku haruno;
furusa*o to koso, narinu beranare.

女學雜誌第貳拾壹號目次

●社說。有力なる婦人會●新報。數件●雜話。和歌の說。五音のかへし。西洋禮式（第五）。西洋料理四十ヶ條のつゞき。日本古代女流の風俗（六）●佳傳。梅香女史の傳（第七）附圖。淳于髡の女父の死に代る事。日本婦女高名鑑れ解（其二）●寄書。結婚條例の制定を待ち奉る。淸元曲節の起原。明治女學校生徒並に私立大坂女學校生徒の文四章●上巳の事●諸廣告

四月二十五日

●物のはじまり（其一）

●勝山髷と云ふハ承應の頃江戸に名高かりし湯女勝山が結び初めたるまげなり

●丸髷を勝山のくづしとするは誤りなりきのふはむかしと云ふ書に丸髷はかんしよより結い初むとあり

●片外しは京都室町家の營中より起りたるにて始は足利義政の北の方妙善院の女中結びそめたるなり

●椎茸たぼはもと葵たぼと云ひたるにて明和の頃よりしひたけたぼとは云へるなり

●たぼさしは延享の頃ろ初て流行り出でたること賤のをだまきに見ゆ

●天明の頃より寛政に至る間に婦人の髪にびんさしとて鯨又は鼈甲などにて鍋のつるのやうなるものをもて鬢の毛を張り出すこと初まれり

甲　徒らに過る月日は多けれど花見てくらす春ぞすくなき

乙　花もみな散ぬる宿は行く春の故郷とこそ成ぬべらなれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第貳拾壹號（明治十九年四月廿五日）

●社説

○有力なる婦人會

今日ハ女權擴張の氣運正に熟したる好機會にて婦人中の先進者が大に興起奮發すべきの秋なりつら〳〵おもんみれバ今を去る二十余年の昔し徳川幕府やうやく政權を失ひ慷慨の義士四方に起りて革命の時運將に發せんとするや死を顧みずして天下に奔走するものあり妻子を殺ろして忠を盡すものあり國事に慷慨して刺客の爲に暗殺さるゝものあり天地慘怛たるの間だ正々堂々たる義士忠臣の氣ハ凝つて自由の雲と爲り時に或ハ落ちて涙の雨となり時に或ハ散じて怨の霧と爲れるも遂に維新革命の大事業を起して數百年間壓制の下に屈したる日本男子の權は玆に於て初て伸びたり當時義士忠臣の困苦を想ふときハ大凡そ因習久しきに至りたる舊弊を破り破るに付て先進たるものゝ如何に奮勉せざる可らざるかを悟り得るなり

然るに女權の維新は一昨明治十七年に其兆を現し今年に至りて正に氣運を熟せり今や數千年間卑屈の極に陷りたる婦人女子を救ひ濟ひ大に女權を擴張して女流社會の維新革命を成さんとするものも亦た必らず往昔ハ義士忠臣に學バざる可らず勞といとはずして女海に遊説し裝飾をすてゝ忠を盡し女惡に慷慨して人の刺りを蒙る如きの事ハ斯る先進婦人の甘んじて受くべきものなるべし一度び目をあげて我國の女風を見れバ藝妓娼妓ハ尙ほ公許せられて數万の婦人ハ禽獸にひとしき惡行を業とし身は奈落の底に陷るを思はずして反つて父母の爲に孝を盡せりとするの少娘あり高官貴人の器具となるを憂へず金傑富人の道具となるを歎せずして反て此等の妾となるを幸とするの婦人あり社會の道德を清掃すべき女德を棄てたゞ世間に惡行を增すことをつとむるの密賣地獄あり此等は第一に除き去るべきの惡風なり又た夫を助け夫の一体となるべき妻婦にして一生その婢女となり迷ひてハ妻られ厭きてハ棄てらる妻婦の權全くこれなきあり子女を養育し家庭の敎を行ふべき婦人にして而も一箇の學識なく子を生み子を育て子を敎ゆるの理をも弁ぜざるの婦人天下に未だ充ちたり后向の妻となり母となり以て第二代の日本人を生むべき娘孃にして今尙ほ三味線踏舞の遊技を專らとし學校に出るを知らず讀書するを惡德とするの弊風尙全く除かざるなり此等ハ次に改良すべきの弊風なり婚姻の條例未だ設けられず離婚裁判の制法未だ立たず男子ひとり勝手氣儘の行を爲して婦人はひとり虐待さるゝを甘んずの有様あり政府に對して之を訴へざる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

可らず婦人の職業未だ起らず之を敎ふるの職業學校未だあらず勉めて此等に周旋せざる可らず大凡ろ今に當りて先進婦人の行ふべき所ろ實に數ふ可らざる也

今かゝる大事の塲合に臨み先進婦人たるもの如何なる方法をなして所云る女流社會の維新を行はんか吾人は婦人の處置のかのあらくれ男の如く亦た慷慨悲壯の武人の如くあらんとを希はざるものなり言をかへて言へバ男子の行は奔流激走まさに富士川の水の如くなるべし女子の行は清緩温和まさに木の下くゞる水の如くなるべし勢やむ可らざるか女子にして劔を握り女子にして天下に遊説し女子にして快壯武烈ならんともとより難なしと雖も是れ事の變にして常に行ふべきの風にあらず故に吾人は今まかれ先進婦人の處置につきてハ茲よ有力なる婦人會を起して以て大に計るとの尤も温和にして且つ尤も効能多かるべきとを信ずるものなり

其の大畧を云はゞ先づ東京に婦人會本部を置き二府諸縣に各婦人會を開き全國みな相ひ交通して共に與に事を成し前に述べたる如き諸事業に對して着々改革の手段をとり第一に此の會員よりして日本の女風を改むべし女權を擴張するとに付きてハ全國の總會員連合して或ハ政府に訴へ或ハ社會に訴ふべし先づ雜誌を發刊して氣脈を通ずべし平易なる科業書を出版して婦人を敎育すべし有益なる文書を編集飜譯して女道を振ひ起すべし女子に職業をさづくるの周旋を爲しまた之に職業を敎ゆるの方法を立つべし其他爲すべきところの事實に多し思ふに今の時に當りて先進婦人の爲し玉ふべき處置ハ必ずやこれを以て最良手段とすべし

然るに今ま我等の探り知る景況によれバ東京に婦人讀書會あり別に愛憐會なるものあり福岡に婦人同伴會及び讀書會あり岡山に婦人原泉會あり仙台に婦人親睦會あり其他耶蘇敎の諸敎會に大抵婦人會なるものあるの外また聞こゆる所なし而も此等の諸會ハ各獨立して敢て連合せずまたかの各會に於ても見るべきの行ひえてあるなきなり」顧みて西洋各國に於ける婦人會の景況をきくよ社會の道德を維持するは大抵婦人會の發議なり例へバ酒を禁じ慈善を主張する如きは其會の尤も盡力する所ろなり貧人を救ひ女流をすくひ敎育に熱心し傳道に熱心する如きも亦た多く婦人會の力なりかの有力なると實にうらやむにたえたり吾人かつてきく今を距る六年前英國の有志者連合して時の大藏卿グラッドストーン」建議しかの久しく國民の不平したる梅毒檢查條例廢止の事を請ふにあたりてや建議者中左の如き諸婦人會

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ありたり

英國婦人會	書記	バツトレル
マンチエストル婦人會	會頭	チツコノル
バーミングハム婦人會	會計	サウセール
ブリストル婦人會	會頭	ルシートーマス
クリフトン婦人會	會計	バツシエツト
リーヅ婦人會	會頭	ハンナ、フホルド
ヨーク婦人會	會計	トムプリン
エヂンバラ婦人會	會頭	エリサベス、ニコル
グラスゴー婦人會	同	エリサベス、ブカナン
ダブリン婦人會	同	アルレン
ベルフハスト婦人會	會計	エサベルラ、エワルト
コルク婦人會	會頭	ウイルヘルミナ、テーロル

西洋婦人の奮發實にうらやむに堪ゆ吾人ハ吾國女風の速よ比よ至らんとを熱望するものなり希くは今の先進貴婦人諸氏幸に愚見を容れて大に盡力さるゝあらんとを踏舞ハ女權を擴張するものにあらず乘馬ハ女權を擴張するものにあらず男女の交濟未ゝ成らざるハ尙ほ歎ぞ可らぞ寧ろ婦人諸氏の同盟連合されざるを歎くべし貴婦人諸氏もし幸にして婦人會の設立の事を計畫さるゝあらバ吾女學雜誌社の總社員ハ固より喜んで一臂の力を添ゐ參らせんとを希望するもの也

●新報

○明治女學校　ハ昨年九月より開校し僅に半年の星霜を立たざれども生徒の數も次第に増し盛大の兆をあらハせり本月一日より七日迄定期大試驗ありしに生徒中英學漢學等にて百点を得たるもの十人其内久野えげ子ハ最も優等にーて漢學作文和文の譯習字筭術の各科悉く百点に滿ちたり以て生徒學業の進歩甚た速なると知るべし該校も現今假校舍なるを以て甚場所狹けれバ試驗に多くの臨場者を請ハざりしとの事なれども大隈重信田邊太一嶋田三郎松山高吉の諸氏及び弊社の巖本善治等之に臨み其の第三日目にハ松山氏女子勉學の目的を親切に誨諭され校長木村熊二氏ハ學問の大要と女子品行につきて切實に演説ありたり同校ハ今回外塾を設けて地方來學の女子に便を供へんと目下其の計畫あるよし松山氏が誨諭の末

まなびのまどよ匂ひ始めけり
日の本の光やろへん若櫻

との一首をことほぎて歌ハれたる如く該校のいよ盛となりて旭日に香女秀才を多く出されんと吾人の切に停望する所なり

○フエリス女學校　横濱のフエリス女學校ハ夙とに學行兼備の生徒を養成するを以て名あると全たく其校の恩人フエリス女氏

の感化によるとなれども一にハ校長ブース氏の久しく教授管理に盡力ありたるゆゑなるべし然るに同氏ハ去る十三日同地を發して米國に歸られたり聞く所よは暫時の歸省のみと云へど師弟の愛ハいさゝめの別れをも惜しむなるべし同氏恙なくして再び來渡ありいよ〳〵の校に盡力あらんとを望む

○女子職業學校　ハ吾人が夙に論じて早く設けられんとを希ふ所なるが聞く所によれバ已に府下に之を設立され目今追ひ〳〵盛大の運びに盡力最中なるよし此等の人々は疾に女子師範校を退かれたる諸君なりといふ

○音樂學校　近頃大坂市中よて西洋の風琴、洋琴等の樂器を玩ぶものもあり又た四區内の各幼稚園、女學校等にても追〳〵之れを用ふる事となりたれども未だ音樂唱歌の專門學校あらざれバとて大坂の耶蘇教青年會員諸氏が協議の上一の音樂私學校を設け川口居留地二十四番館の米人チール、チン氏を校長に聘する事となさんとて目下それ〳〵準備中なりといふ（四月六日大坂日報）

○小說の不德　近來道德大に破れて汚穢不清の事公然として行ハれ之を言ふものハ誇り之を聽くものハ喜ぶの風あること實に慨歎の極にたえぬ特に小說の如きハいよ〳〵品格を落し間夫姦通の事を記るさゞれバ盜賊亂子の行を述べて以て快となすもの比々として之れあり學士を以て自稱する所の人にして其れ筆をるところを見れバ倘更に甚しきあり慷慨の思禁す可らざる也此頃福岡日々新聞を見るに女護島物語なるもの、新著を廣告して云へるあり曰く

此書ハ諸君が枕艸紙などで能く御存知の女護島へ古今無雙の大○○家たる弓削の道鏡君が名を臀五左衛門と僞り惠美の押氏勝を從へて渡行し該島と蹂躙せし種々變幻奇妙重來の快事及び該島の事情景況等を詳記せしものにして現今加能越新聞社長たる石井俊郎先生の戯作なれバ充分風俗を害するま猥褻至極の浮書なり（トハチト）助倍諸君一本と購求し春日の長を慰めたまへ

と嗚呼不德の行ハるゝ一に何ぞ茲に至るや希くハ政府當路の人速に如此き猥褻至極の廣告を禁止し玉ハんとを吾人ハ強く之を切望するもの也

○女子師範科卒業生　廣島師範學校よてハ去月廿日卒業證書授與式を行ハれ女子師範科にて中等卒業生徒四名同初等卒業生徒四名同初等卒業生徒五名ありたるよし

○學校移轉生徒增募　滋賀縣師範學校女子科にてハ是迄大津市中の或る寺を假りの教場に定めありしが今回公立開達小學校れ跡を更に修繕して去る一日同校へ移轉せられ生徒をも新に增募

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

されて唱歌音樂の學科を教授し体操をも實施せらるゝことに着手されたりといふ

○景山英女　曩に記るしたる如く當今國事犯嫌疑事件にて大坂に拘留中なる同女が獄窓の下にて即吟したりと云へる詩一篇あり左の如しと本年三月廿七日の内外新報に見ゆ

愛國丹心萬死輕。劍風彈雨亦何驚。誰言巾幗不成業。神后曾開赫々名。

又本年三月十六日の福島新聞によるに同女は本年廿歳岡山縣岡山區富田町士族景山確氏の長女にて早くも幼年の頃小學科を卒業し明治十四年岸田俊女史の遊歷に際し交を通じ爲めに大ひに政治思想を起し爾來翻譯書等につき政治書を研究し又竹内正志氏(英學に通ぜし人)の母久女、津下正五郎氏の妻粂女、漢學者上森操女等と謀り女子五十余人を團結して女子親睦會なるものを設け毎月數回相會して女子の弊風を改良せんことを謀り續ひて明治十六年中女子私立夜學校を設立し小林樟雄氏の妹にて目下擶見逸刀太氏の妻なる眞女と之れが教師たり竹内久女、津下粂女、之れが幹事たり其節評判よく入校者七十余名に至れり斯て其翌年自由主義を取る所の壯士輩が岡山旭川に於て遊船親睦會を催ふしたるとき英女も亦同志の女子數名と學校生徒を率ひて遊船會を催ふし船を旭川の中流に放て英女を始め同志の女子等交も〳〵立て演説を爲したり先是小學教員たりし擶見逸刀太氏が免職となりたるより同校生徒等相謀て岡山區役所へ押掛け其理由を詰問する等の騷ぎあり爲めに退校を命ぜられたるもの數名ありしが是等の生徒も該會に雜り居り英女の振舞ハ是等にも影響ありたりとか是が爲にや同夜學校ハ其筋より閉校を申付られたり是より先き津下氏夫婦ハ英女を以て小林氏に妻ハせんと周旋せし事あり風説に依れバ此時既に結婚の内約調ひしとの爰に至て英女は告げずして郷里を發し小林氏に東京に會し同氏れ紹介にて在京の舊自由黨員其他の同志に交際を結び土佐人坂崎氏の門に入り同志の女子數名と英學を研究し居たり英女常に我國女子の卑屈を歎じ歐米女子の活潑を慕ひ曰く日本女子の卑屈柔順に過るハ女子自ら生活れ道を立る能ハず專ら男子に依頼するに在り若し我國人をして將來に活潑勇壯の人たらしめんと欲せバ女子自ら生活の道を立るにありと客年初夏の頃なりしかん坂崎氏の門にありたる女子數名相謀て斷然男子の助力を謝絕し居を木挽町邊に轉じ洗濯、賃仕事、髮結など思ひ〳〵に長所の業を爲しつゝ英學を勉强なし居たりしと因に云く英女の母も中々學力もあり諸禮式に通じ目下岡山藝妓學校の教師たりと云ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○女子の自由　凡ろ我國婦女子の自由(とハチト大層だが)ハ之れを西洋に較ぶれバ其優劣如何ハ知らざれども之れを隣國たる支那の婦人に較ぶれバ霄壤の差異ありと云ふべし例へバ我國の婦人上は御簾中奧方貴夫人令孃の貫より權妻、神さん、かゝあ、山の神、娘、藝者、女郎、お炊の賤に至るまで劇場に赴きなま青き役者共のつらを眛めて涎を垂らすの自由あり(貴重の自由)もろつゝ甚きは役者共を召して盃酌に侍せしめ以て畢生の快樂とそるの自由もあり(極點の自由)此自由を初として物見遊山隨分勝手に振舞へバ振舞れぬ譯もなき樣なるが支那にてハ全く斯る自由を得ず古ハ上等夫人ハ深窓の裡に垂れ籠めて決して公場に出現せざりしが此頃漸く此風を脱してたまにハ劇場に車を枉ぐるの婦人もあり其他物見遊山に出掛るものもあるに至りにけれバ北京の道台ウェンハイ氏ハ之れを見て大に風俗の衰頽せるを嘆じ此弊害を矯めんが爲め罰令按を草して之れを上奏し嚴禁を令せられんことを請ひたり其禁令按に曰く

若し今後婦人の身として公場に立ち入る者ある時ハ嚴に其從婢を罰すべし若し從婢を家に殘こして自ら外出する時ハ其夫を罰そべし若し其夫人の夫ハ文官たる時ハ官吏懲戒令に當つべし武官たる時は杖刑に處すべし

若し此議にして行はれなバ支那婦人の不自由想ひ遣るべし我國の夫人達此國に生れたるの幸福を賀し給へ(四月十日東京日々新聞)

○選女　皇太后にハ去清二月十日寅刻に於て宮中の使女を御選看あらせられ内務府包衣三旗の子女は同九日の夜神武門より宮に入り選看に供するを以て當日ハ各王大臣の出勤に同門の通行を差止られ又た同十八日には午刻を以て入選の秀女を選看せらるゝに付孰れも本旗の地段に相揃ひ指揮官の差圖により各旗順序を立て地安門内東沙灘の地に至り同所より次第に車を排し寅刻を以て墻門に隨ひ東に進み神武門より宮に入るべき旨達せられたり最早其期日も相過ぎたるとなれバ不日此盛典の詳を聞くに至らんと甚だ待ち受け居れり(四月九日同上)

○外國人の後見　横濱なる日本人某の許へ養はるゝ一女子イサベラ、ボルサ、パーレーといへる英國人ハ不幸にして前年兩親を亡ひしより身を今の所に養育され財產ハ神戶在留の英國人の手に預けあり左れバ某も孤女の後見を依託されしとて我手に遺產を受取らんと欲し又た英國人も同く孤女の監護人なりとて右女子を引取らんと爭ひし末横濱始審裁判所へ訴へ出でしが後岡村同所長より左の通り山本正義氏へ其後見人を命ぜられ事濟みお

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ありしといふ尤も我邦の法律改定以來内外國交渉の件に付外國人の教育及び保護を同廳より命令せしは今回が嚆矢なり

命令書

東京府下下谷區上野元黒門町十七番地
青海私立學校主靜岡縣士族　山本正義
イサベラ、ポルサ、パーレーの教育及監護を命ずるもの也
明治十九年三月廿三日
横濱始審裁判所長
判事　岡村輝彦

○上野花見　紫一本に云く東叡山黒門より仁王門までの並木の櫻の木の下に花見衆なし松山のうち清水のうしろに幕はしらかして見る人多し幕の多きときは三百余あり少きときは二百あまり有り此外につれだちたる女房の上着の小袖と男の羽をりを弁當のらんたる細引にとほして櫻の木にもひつけてかりの幕にして毛氈花むしろしきて酒のむなり鳴物はならず小歌浄瑠璃踊仕舞はとがむるとなし本町通り町を始め有徳なるもさもなきも町かたにて女房娘正月の小袖と云は仕立ず花見小袖とて成ほど手をこめ結構にぞてなる物ずきにしたるを着て出るなり花よりなほ見事なり花の頃は空くもりておほかた晝過より雨ふるしかれども傘をもさゝずよき小袖をすきとぬらしてかへるを遊山にも又た手がらにもする也と云り此文天和の頃のありさまをまのあたりに見るごとし上野も今は昔しの東叡山にあらず山内の装ひも維新この方いろ／＼に變じ今は公園地に改められたれば花見るさまも亦たその趣と異にせりされば懷古のかたみにまで茲に抄記すになん

●叢話

○和歌の説　（三）

自得和歌集の序　白河の樂翁公

玉葉風雅のふたつの集はいとおもひ入ふかくぞ覺ゆる歌よまん輩始より三代集などをまなびてはいと本意の得がたきのみか吾がものともつゐに成べからずされば かの新題林などいふ今ぶりを見てまづ歌の文字とならべられよりこのふたつの集によりて己がものとなすべきやうにと詠みなせば何日か御代の風にもちかきかたなど出來るものもありぬべしすべて此のふたつの集は爲家卿の子なるが一人は二條家の祖となりひとりは冷泉家となりたりいま一人の爲兼卿が撰したるは玉葉にしてそれにつぎて集めものしたるは風雅なれば此の風によりて古の歌の道にも至りつべし只だ力なき輩の己がものになりしにあらざればその風は得がたし己がものゝみなりしよりして切つみてころ彼の三代の風にも至りつべし今の歌よむものは多く人のことをうち似せまねびつゝ己が心よりおもひ出でたることの葉には多くあらずとぞおぼゆれあ○かなるとて斯く人のことにより人の爲になすことの葉正しき國ぶりなるべきや左らば此の二集によりて毘沙門堂は風とおこしてんとて葉月五日より二つの集を書ぬきてみづからうち

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

合せつゐにかくれ記るせしなり此頃あやにくゝ事多くかの兵書をもゑらびぬれバそのふたつかたになむなーておなじ月の十あまり八日の朝かきおわり侍りぬ

○五音のかへし

左の一篇ハ周防岩國の人熊谷千邦と云へる方の著なり余りに面白き教ゆゑ吾人が一昨年女學新誌を發刊したる初めに掲げたるが今まかく改めて女學雜誌と爲したるによりてまだ見ぬ人もありぬべしと思ひ復び茲に載せて和學する人に示そ

ゑきしまの吾が大皇國ハ詞正しくして先哲のいひれたる如く單直の音を唱ふる事ハ外國の能はざる所ありさるを世の下れるまゝに國語や亂れてつゐに事の意さへ惑へることゝなりぬ之を正しくせんと思へゞ古言の歌文を辨まへ知るべし古言を辨へんには五音の反を心得べし五音にかあハざる詞ハなきなりさて五音の反といふハ二字を約めて一字になそとなり此の反しやうハ上の文字を父字とし下の文字を母字とし父字ハ竪にゆき母字ハ横にゆきて其のゆきあひたる所の文字を反り字と云ふ卽ハち子字なり例へバ

訓蒙五十連音の圖

ア行	あいうえお
カ行	かきくけこ
サ行	さしすせそ
タ行	たちつてと
ナ行	なにぬねの
ハ行	はひふへほ
マ行	まみむめも
ヤ行	やゐゆゑよ
ラ行	らりるれろ
ワ行	わゐうゑを

命あれバ多くの春に逢ぬれど今年バかりの花ハ見ざりきと云ふ此のきハけりにて見ざりけりなり此のかへしやうハけハ父字にて右の圖にあるか行の四段にありりは母字にてら行の二段にあり父字のけハ竪に行き母字のりも横にゆきて行き合ひたるところのか行二段のきの字反り字なりゆき、見き、かへりき、聞き、なども同じくけりの反しのきにて往りけり、歸りけり等なり（未完）

○西洋禮式（第五）

西洋料理四十ヶ條のつゞき

第廿三　殘骨と舐り殘り汁と啜りなどして余りたべ盡す勿れ

第廿四　椅子に憑りかゝり食卓にもたれなどする勿れ

第廿五　食事中恣まに起坐そる勿れ

第廿六　他人の笑柄と殘そ樣に余り一物のみを多く貪る勿れ

第廿七　食事中無中になりて話し庖刀三股と揮ひて手まね物まねとする勿れ

第廿八　自分の席にすゝめられたる食物を次席の人に讓るハ禮讓あるに似たれど主人に對して却て失敬なれバ之を辭退してゆづりなどする勿れ

第廿九　對食する人の足に我足のふるゝ恐あれバ假令ひ食卓の下なりとも余り恣まゝに足を伸そ勿れ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三十　品おとゞ擧るときは眞實に美味ある物を擧るの差支となれバ稱賛ハ過度に渉る勿れ

第卅一　ゆでたる玉蜀黍ハ横かじりに爲る方が甘味多きものゆゑ強ちに庖刀にて實を削りをとす勿れ

第卅二　食事中咳くしやみをる勿れ已を得ざれバ次席へ出でゝすべし間に合ハぞバ手を以て口を蔽ふべし

第卅三　食事中已を得ざる事故出來して其席を去るも公然之を衆に告る勿れ但しひろかに隣席の人ょ話し置き去りたる后ちに傳言しもらふべし

第卅四　傍人の胸をわろくする樣なる汚なき話をそる勿れ

第卅五　食堂に在るとき滑稽洒落などの根なし話ハ妨なけれども理窟めきたる六かしき話ハする勿れ

第卅六　食堂に入るにハ必ぞ衿紐又はシヤツのぞりを着くべし然らざれバ恰も肌ぬぎ鉢卷よて食事するやう思ハるべし

第卅七　上客ハ常に已の右手に置くべし男女混交の食事にハ男子一人に付き一人づゝ女を引受ケ其右に女を坐せしめ万事世話すべし

第卅八　婦人へ食鹽をまハす勿れ大なる失禮なり

第卅九　庖刀にて切るときカタ〳〵音さする勿れ

第四十　物を食ふとき成るべく口音をさする勿れ

以上四十ヶ條はたゞ其大畧を示すのミ

○肉を買ふときの心得

肉ハ体の養におるものゆゑ買ひ求めて食用するハ宜しけれども成るべく新しきを求めざれバ反つて害ありよりて今まもろ〳〵の肉のよしあしを知る方を左に敎ゆ

牛肉ハ肉鮮やかに滑らかに此にふれて軟らかなる此を豚めて色赤きハ若牛の肉なり尤も宜しとすべし肉につける脂肪は白かるべく決して黄ろなるべからぞ黄ろなれバ肉の質必らぞあしきものなり

豚肉の皮丈夫にしてあつきハ老ひたる豚なり薄き方をよしとす肉の滑らかよして冷やかなるは新らしきなり肉のねバり氣ありて粘着するは已でに陳びたるものなり

羊肉ハきめ細かく色好く脂肪白きをよしとそ

小羊の肉の緣色と帶たるか又ハ黄色なるハ腐れたるなり

小牛の肉の尤も白きと養分尤も多し

撓豚ハ皮うすくして脂肪緊まり肉の色よく且つ密着せるハ新しき品なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鮏の新しきは肉赤く鰓ことに赤く鱗赫き肉かたきものなり
蟹の目のしまりなきは肉そでに腐れたるなり

○日本古代女流の風俗（十八）

拂眉の風も甚ふるくより傳りたることゝ考へらるゝなり其眉を拂ふは何が故ぞといふに別段に畵眉を作らんが爲なり官女等が額につくるボウ〳〵マユと俗に云ものは即ち其遺風よして古く史に見えたるは古事記なる應神天皇の御歌に麻用賀岐許邇加岐多禮云々とある是なり此御歌は天皇山城國宇治郡木幡村にて矢河枝姫といふ美人に行遇つぎの日ろれ姫れ家に入御して姫に酒盞を賜ふ時よ姫の麗艶を稱て歌はせ給へるなり麻用賀岐は眉畵にて許邇加岐多禮は濃厚よ畵垂といふことなれば當時の女子が眉を拂ひて畵眉を畵き粧へること知られたり又た萬葉集の歌に（六巻）三日月の眉根（十四巻）麻欲婢吉能與許夜麻（十九巻）青柳の細き眉根を云々などの句もわれば其畵ける畵眉の狀も推て知らるゝなるべし字鏡てふ最古き字書にも黛青黒色也。婦人飾眉黒色也（万與加支）とあり近世の風は人の婦とならざれば眉と拂はざるなれど往古も人に適ざる女にても眉を拂ひて畵眉つけしことは矢河枝姫のことを詠たまへる應神天皇の御歌よても明らなし爾して今の婦女の眉を拂ふのみにて畵眉を用ひざるは思ふに下樣れ婦人は尊貴の婦人の如く身を粧り容儀を繕ろひをることと能はぞ廚下のことより小兒のことに至るまで其勞動に齷齪そるが故よ平生は畵眉を用ゐず只眉を拂ふのみよて儀式の際に畵眉したりけんと後には夫さへも廢りて平生儀式ともに眉を拂ひしまゝ畵眉は用ゐぬことゝ變ぬらし畵眉を粧らず只眉と拂ふのみの風俗となりしも餘り近き世のことよは有ざるならん文安の頃のものなりといふ京四條町の見世棚の狀と寫しゝ繪卷を見るよ婦人はみな髮と後よ垂て眉を拂ひたり

歯を染め眉を拂ふも素みな華美を尙ぶの心意より起りしものにて此他にも赬土をもて面部にぬり珠玉をつらねて頭上より肩に垂などして身を飾れること古書よ明らなり斯の如く虛飾と愛ずるは敢て我が日本のみよもあらぞ支那の風俗にも往古より燕脂鉛粉を用ゐ指甲をさへ紅く染たるみと彼土の典籍に見ゆ又た印土其他の國々よても悉〳〵く實際の便益よりも外形の虛飾を尙ばざるなく或は鮮麗しく身と文どりせんが爲よ體軀の疼痛を忍び或は極寒酷熱を凌ぐの策には意と用ゐぞして指環臂釧を身よ飾らんが爲に心勞そる等のみとは珍しからぬ事にてオリノコの土人は甘んじて寒暑の苦をうけ專ぱら人の稱譽と得んが爲よ面貌を粧飾そる彩粉を購求んとて非常の勤勞をなし又たろの婦

女ハ身に一片の布帛をも纏ハずして己が茅舍を出るを辱とせざれども面貌に粉黛せずして戸外に出るを禮法に背くとなして一人だに犯すものあらざるといふ世の進歩に從ひて嗜好尚愛も亦おのづから進歩し漸に高尚には趣く可けれど華美の便利に先ち虚飾の實益に勝る性質に於てハ開明の今日も野蠻の昔時に異ならざるが如し歐米の婦人が耳に飾を垂んが爲に疵なき場所に特更に穴を穿ち容儀を美ハしくせんが爲に胸部を緊縮して健康の害をも顧みざる等のことも其の一例ならん乎　(未完)

●佳傳

第七

○梅香女史の傳

與好の友ハ離る横濱港
無情の人ハ會ふ蒸滊船

(孝)青山さん大抵何日程で御歸りでせうか(梅)ハイ母の病氣次第ですが成らバ此休の終る前に歸りたいと思ひます(孝)ドウカ左様なると宜しう御座ますが貴方の卒業ハモー一年ですから若し御母さまをあちらへ御連れなさる都合ならバ尚宜しう御座ませう(梅)父ハ行衛知れず母もコチラへ來て厄介になるハ好みますまい此上私の勉強の成る迄ハ思ふ様にならぬと斗りです然し松本さんたゞ勉強です勉強で出來ないとハありませんね(孝)左樣ですとも私も先生達の御蔭で漸う今度卒業ハ致ましても此からが大事です此迄の勉強は云ハゞ誰れもすることですから(梅)ソレにしてもあの澤山さんの連中ハドウしましたらう去年卒業すると直に何處とかへ嫁に行れたとか聞た斗りですが今は何樣しましたらうあれですから實に女權を伸バすとも何も出來ません(孝)私も此れからが迷ひ易ひ時ですからドウゾ万一ソンナ事でもありましたら何事でも忠告してください到底友人の導がありませんでハ獨立も出來ませんから(梅)ソリヤ御互ですアノー成る丈け早う歸りたいと思ひますがどうぞ先刻御話申しました雜誌を送つてくださいよ(孝)ハイ確に貴方ハお着なすつたら直に御手紙を(梅)大丈夫です時に叔父がモー見えさうなものですがア、アレ松本さん何方から來玉ふのハ田中さんジヤありませんかそしてモ一人は古木さんでせう(孝)ホンニマー左樣ですアノ商人風の人と敎師さんらしひの御二人の亭主でせう(梅)嗚呼ア、あの通りですからナー」(田中)チヨイト古木さんあすこに居らつしやるのは例の梅香さんに松本お孝さんでせう(田中)チ、さう〱(商人)ナニ學校友立かコイツも面倒だな(田中)松本さんに青山さん御久しう其后ハ御無沙汰斗りいたしまして實ハ時々學校へ參りたいと思ひましてもツイ〱(古木)御兩君御久し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

う實に一年間一日も御目にかゝりませんでしたので余程久しひ様に思ひまそコレハ愚夫でそ（教師）初て御目に掛りまそ私ハ高橋渡と申ます以后何卒（田中）アナタ御二人に（商人）私ハ古木才三と申しますかねて御名前ハ承りました愚妻がいろ〳〵と御世話になりましてゝゝ以后ゝゝ時に貴人方ドチラへ（梅）ハイ私は母が病氣でそから一寸國元まで（才三）アゝ其ハ御心配でせう失禮ながら御國ハ（田中）アナタは鹿兒島で居らつしやるのでそ（才三）ろれハ實に好機會でした私等ハ此から有馬へ参りたい積りですが貴人は定て今日の船で入らつしやるので

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せう(梅)ハイ(孝)青山さんツレハ善い御連が出來ました神戸まで御一處なら其先はモー御安心でせう(渡)アナタハ御一人ですか(梅)イヘ叔父と一處ですが一寸居留地へ參りましたモー來るでせうと思ひます(田中)古木さんよい御連じやありませんか船中で昔のトランプ遊びがまた出來ませぜ(才)ドウカさうあれバ好いでそが遠州洋の御介抱もお斷りですハヽ」　(孝)ツレデハ青山さんドウゾ御体を大事になさいましまた御着なすつたら切度手帋をアノー神戸からハ端書でも宜う御座いますからまた御母さまにハ御目にかゝりませんがドウゾ宜しく皆さんツレデハ御丈夫に(梅)松本さん實に有難うと云ひ乍ら小聲に厭な連が出來て反て困りますよ(孝)またソンナ事を仰しやるいろ／＼教へて御やりあさいな(梅の叔父)松本さんさよふ／＼御送り下そつて有難ふドウゾ御母さまによろしく(端舟の船頭)チツト早う／＼旦那モー少し此方へ、チイ出スヅ、ヨイトセイ(客)船頭さん本船までコレデ何町あるだらふ(船頭)マー小一里かな」　(孝)アー端船がモー着ましたかどうか青山さんが二人と言ひ合ひでもなさらねバよいがと見やり乍ら甲板に三四人ならびたるを微かに見とめて思ハずハンケチを揮りまはせバ彼方にも亦た洋傘をさしうごかす心あいたる友立れなさけハ之に知られたり

○淳于髡の女父の死に代る事

漢の淳于髡が女に緹縈と云ふものあり孝文皇帝の時淳于髡其齊の國に官たりしがあやまちありて死罪に處せらるゝこととなり又其子五人ありしかども皆女にして男なし淳于髡とらわれて行くときに臨みあざれ五人の内一人にても男の子なりせバ斯ることあるときも一簾のたすけともなるべきものを子を多く持ちても男子にあらざれバまさかの時にものゝ用に立たずとて女どもの言甲斐なきことをうらみて怒りたる中にも緹縈ハ年尚ほ幼けなかりしがこれを聞て悲嘆のおもひに堪へかねなく／＼父の跡を慕ふて長安の都に趣き父ハ已に獄にくだりけれバ緹縈自ら上書をさゝげてなげき訴へけるそ父淳于髡が齊にありて公の事をとりしも潔白にして勤勉むるのほかとれあらざりきかるに思はざることによりて今罪を獲たりうけたまハれバ死罪に處せらるべきに極りつるよしなり夫れ死そるものハ再び生き斬られたるものハまたつぐことなし過ちを悔ひて改めんとそるともまた及び難かるべし伏して希くは緹縈がいのちをめされて暫く父か罪科となだめられんことをと申述らる文帝之をきこしめされ其志を叡感あり孝思の至れるを深く愍ませられ遂にその願ひによりて父が罪をゆるされける又あまねく四海のうちに詔りを降

したまひ死罪肉刑の法をば殘らず廢せられたり緹縈が詞は十善の君のおん心を動し奉りて父が死罪を救ふのみならずこれが爲に天下万民の下にまで幸福を蒙らせけるは全く孝行の德の至れるが故なるべしと後の世までもつたへ稱しける

○日本婦女高名鑑の解（其二）

本誌第十八号に掲げたる高名鏡中の人々を略傳するものゝうち

乙橘姫は日本武皇子の妾なり穂積氏、忍山宿禰の女なり、皇子東征の日相摸より上總に往んと欲し海に浮ぶに及で暴風忽ち起り船將に覆没せんとす時に乙橘姫曰く是れ海神祟を爲すならん意ふに身を投じて皇子の命を贖んと言ひ終て海に投じて死す暴風即ち止み岸に着くを得たり故に時人其海を号して馳水と曰ふ皇子碓日嶺に到り乙橘姫を追懷し東方に向ひて歎じて曰く吾嬬邪と故に後世東國を稱して吾妻國と云ふ（本朝列女傳）

●寄書

○結婚條例の制定を待ち奉る　大坂　菟道　春千代

天津日は男女の別ち無く均しく照し玉ふべしされば男と云へど強き尊き者に非ずして女と云へど又別に卑き者に非ざるは云はで知るべき事ながら天津御祖とおはします天照大御神には女神にて世を治め玉ひし古き例もあるをもて辱くも明治の御代となりてより王が政も古に復し玉へる御主意にて女たりとも家の戶主となる事を聽許し玉ひしは此上なき幸と云ひつべし然はあれども遘合に至りては古き神代の昔より開けし御世の今日迄も夫と婦との其中に盡す義務は公平ならず一人の男が數多の女に交るも男の權利なりとして更にはぢらふ色もなし是に引かへ女にて二人の男に見ゆれば已が貞操も破れ扇逐にて骨をも碎かるゝ過苦き苦鞭にうたるゝも之を咎むる法律なき男の權力あく迄も強きを開けぬ時代の常なるが近き頃に至りては女の道も漸々に進み歩むに從ふて世の新聞や演舌にいたく此事を弁へ玉ひし其故に少しは夢も覺しかと思へど其は中々に斑駒の耳振り立て聞者は絶て雨夜の星ほどもあらぬはなべて世の習慣とは云ふも愚や日の本の徽章を以て飾りたる官服を纒へる人等や學の庭に立入て敎の師と仰がるゝ尊き人の品行を見受まつらばあさましや容顔よろよ〻れ道の心は泥に垢れたる藝娼妓なんどに精神を蕩かして果は新聞にて笑はるゝ醜態を世の中に示し玉へるとなれば卑き賤の下等者が風俗を亂すは理やとは云へ之を捨置ばみだれくて常闇の暗き世界とあるぬべし疾く此惡弊を改めて清く濁らぬ大御代と萬國にも賞めらるゝめでたき國となさむにはい

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゐなる術をか用ゆべき其は先づ政府の保護を仰ぐの外は手段なく亦其の官の守護とは豫て噂を聞くなる男女の結婚を正す條例の制定を一日も早く發佈ことを我は偏に松の葉のたとへ散とも枯るとも二葉はなれじ何時迄も互に年を呉竹の其のげなく幾久に同じ色なる紅の花咲く春も木枯のさみしき冬もかはりなく共に樂み苦み扶け助て相偕に老ゆく先も尙更にたとへ現世を去りぬとも同じ地なる一穴に埋れて朽む心もて此世を安く平に睦み暮すぞ眞なる人の道とは思ふゆへ喋々しくも繰言を文し連ねて公の司人等に言擧て祈り奉るは結婚の條例を早く議り定めて國人の惡き舊習をば嚴かに戒め玉はんことをねぎまつる

三五舍二八　投

○清元曲節の起原

清元譜節は原富本より分派したるものにして今其の子弟流派の正統を尋ぬるに初代清元延壽太夫は幼名吉五郎と稱し元來江戸横山町にて茶油を鬻ぎし岡村藤兵衛の男なりしが天禀淨瑠璃を好み其の頃高名なる淸水延壽齋に從ひて出藍の名譽ありしより頓て師が前號齋宮太夫の名蹟を承嗣きて延壽齋の脇を勤め本石町三丁目に住居せり（延壽齋は元來武家に成長し後米商賈となり通稱淸水屋太兵衛と云神田川又南茅場町に住居して初代富本豐前掾が門人なり二世豐前太夫午之助たりし時その囑托に依りて後見となし富本齋宮太夫と云ひしかど後不和となり本姓淸水を名乘り剃髮して或縉紳より賜はる所の延壽齋の名を以て號とす享和二年七十三歲にして終れり）又延壽太夫は師が沒後故ありて文化五年豐後路淸海太夫と改名す（此の時徽章に靑海波を用しとぞ）然に師が淸水の姓絕えん事を太く歎き其の餘齋荒井某氏の懇望に因て是より淸水と名乘る同十一年市村座に出勤せし時故ありて又淸水を改め淸元（這は淸水の一字を取りて淸元と云り）延壽太夫と號し一派の曲節を語り出して世に賞せらる薙髮して二世延壽齋と云ふ文化八年に終れり男巳佐二郎は榮壽太夫（此の名も或縉紳より賜はる所なりとぞ）と號せしが父が沒後二世延壽太夫と改名し亦世に賞せらるゝ事甚だし新橋餌鳥屋敷に住居して鰹節と鬻ぎ通稱岡村藤兵衛と云ふ弘化元年の冬亦通稱藝名共に太兵衛と改めり男某は父が技藝を嫌忌ひて早世す其の頃淺草今戶町の材木商藤田屋繁次郎なる者只管延壽の名を懇望せしかば則渠に其の名を讓與て三世延壽太夫となせり太兵衛安政二年五十一歲にして終り又三世延壽太夫も程なく沒したる後太兵衛の妻イツなる者善く其の一家の曲節を傳へ居りしが安政五年女エツに谷中善光寺坂下町の質商賈三河屋齋藤源之助を婿となして岡村の家を嗣がしむ則現今の四世延壽太夫是なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（梅の春通解）又左に記す所の太田蜀山先生の淸元延壽の四字を句の上に置きて讃せし狂詩は必らず淸元稽古本の紙末に出して今も此の流儀の明證とす

淸怨欄絃曲貫珠　元聞此調滿東都
延招共賞陽春寡　壽席歡場待太夫

○西洋にある友人に送る文

明治女學校生徒　田邊龍子

光陰はじつに矢のごとく別をを惜しミ奉りしもはや一年餘りになりはべぬ此ほどは猶々御勉強のしるしもみえさだめて御成業の御事と推しよろこび居候八重のしほぢはる〳〵とおもひ立賜ひしはこゝろざしは中もさらなり御兩親樣のなみ〳〵ならぬ御心おきてもおよばぬ御事とぞ〻もつねよかたり聞け候當節は龍動に御留學のよし同所は市街家屋美麗にて文明の樞軸とうけ賜はり加ふるに婦人の風習も高尚に敎育も行とゞき候よし百聞は一見にしかずとうけたまはり候へばひとたびそと存じながらわじ間の舟はさむりしげくて心にまかせ不申せめては御歸京のふし萬れ御とゐしにてもうけたまはり度樂しみ居候風土もかはり候事故玉體御大事よ被遊候樣祈居候かしこ

○同題

同校生徒　井上直子

林花錦ヲ綴リ鳥語笙ヲ調フ烟霞澹蕩トシテ春色畫ガ如シ君ト袂ヲ分チシヨリ匆ゝ已ニ一年ヲ過了シ又靑春ノ來ルヲ逢フ光陰急ナルヿ山川ノ流ルヽガ如ク少壯再ビ得ガタシ田翁苗ヲ插ムノ時ヲ少ルナラバ北悔必ズ多カラン人幼ニシテ學バズンバ又何ヲカ企望セン聞ガ如シ文運ノ隆盛ナル歐洲ハ英才哲士ノ蝟集スル處ト以テ君ノ見聞ヲ長シ智識ヲ廣ルニ堪ル可シ今ヨリ數歲ノ間乞フ黽勉其業ヲ勸メヨ寒暄不一幸ニ珍重自愛セヨ君ガ業成テ歸ルノ日西窓ニ燭ヲキツテ巴山夜雨ノ情ヲ話セズ蘇錐蘆帷ノ辛酸ヲ談シテ以テ久別ノ情ヲ慰センヿヲ望ム

○そみよしの、はまに、かひ、ひらふを、さそふ、ふミ、

私立大坂女學校高等科第一級生　高橋つね子（十三年六ヶ月）

のべはきくさの、もえいづる、ころとなり、もゝ、さくらのはなも、ひもとき、ろめて、さきミだるゝ、ろらの、うらゝかに、いとのどかなる、どのところを、いかに、ゐがめさせ、たまふらむ、たのれは、いりで、すみの江の、なよおふ、とそれくさに、うつろみはよの、うさをも、わすれ、ひとし防の、みどりろふ、きしのひめまつ、おとたてぞして、
ふくかせも、のどけきろらに、すミよしの、
はまのしほがひ、ひろひあつめむ、
とおもひはべり、いかで、きミにも、まなびの、みちにのみ、こゝろいれ、たれゐめて、のみ、おはさんよりは、ひとひの、すさびに、ミこゝろを、なぐさめたまはん、かたこそ、よろしく、はべらむと、おいたる、くすし、めかえて、きこえはべりぬ、もろともに、ゆかせたまはゞ、うれしうなむ、　うしこ

○同題

同校　同級生　中村かね子（十四年四ヶ月）

もをかる、あまが、むかしべすみし、すみのえの、きしに、たおとい㐂、ひおろのうさを、わすきくされ、ゑるしありやと、つむさへに、はまにおりたち、から㐂世ならぬ、ゑほかひを、しほのひかた

に、ひろひあつめ、いへづとに、せばやと、ともどち、みたり、いつたり、かたらひはべり、さるを、れんみにも、まなびのまどにのみ、さしおめたまはで、こゝろ、のどけき、このごろの、はるげしき、わざに、すぐいたまはで、もろともに、はまあそび、せさせたまはゞ、うれしうなん、いかで、みかへりおと、まちたいまつる、

もろともに、ゆきてひろはん、すみのえの、はまへにたりて、うちよすれかひ、

〇上巳の事　　山田淳女

貴社雜誌第十九号に備中の川野君のねもごろに上巳の譯をせられ漢土の書どもを引て其三月上の巳の日たる事慥めたまへり誠に以て懇切なるかくありてこそ我三千七百万の兄弟姉妹ところすべけれ海山數百里をかく隔てたる吉備の中山中々にいと近き心ちぞせらるこたびわれの疑ひをも解れ且は雜誌の面目をも施こされたるみいたはりをかへすがへすも悦び申になんさるはおのれが申たる上巳は三月三日と申事もろこしにては知らず我日の本にては上巳は三月三日と申事君が言はに自から慥に定められたりけれは柳川野君が古への例を引て三月上の巳の日と云事を確乎と論づらひ給ふ上からは彌うおかぬ三月三日にこそ侍れいかにとなれば往時某の天皇の御時三月三日大内にて曲水の宴を催し給ふ是我國にて上巳の始め也（國史畧公事根元等を見るべし）此日上の巳に當るや否やも知らねどもそれより後は例として三月三日は曲水の宴を催されたるやに承はれり彼大和歌詞にいへるはさらに漢土の事にはあらじ又が大和詞をいふなれば三月一日といへるは大なる誤ちなるべしさて我國は漢土にならひて五つの節句を定められしも正月十五日上元三月三日上巳五月五日端午七月十五日中元九月九日重陽合せて之を五節句と云ひもはら上にも祝させ給ひしを洋風一度吹起りしより漢の言の葉吹散らされ歌よ詩よつらねなる言ばの花實はのこれども目に見る形は跡形なうなりにたり川野君の御論らひにて維新以來の若き人々は耳新らしき事をきくらめおのれ如きの老人は只今を見るにも先古きことのみ忍ぶ媒介となるのみさて禿たる筆を取て遥にとほき浪花の浦より吉備の中山帯にせる細谷川のさやけくれはする中川の君のみもとに奉りみ心ぞへの置なきを謝しまつるになん或人の歌に岩間行花の杯まてしばしまず言のはゝかきもあかさず

正誤　第拾九号新報。岡山通信（百十七頁上桁）中女子科五級生は四級生六級生は五級生の誤植●同上百二十八頁上桁十一行目人の涙には人の袂（タモト）の誤植●第廿号寄書欄内。山田淳女史の投書文中たまとあるははたの誤植。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

近藤淡水編集

●作文指南

毎月一冊發兌正價一冊拾錢全國無遞送料六冊前金五拾五錢拾二冊同壹圓十錢

本誌は山間僻邑の子弟が作文に志あるも師友に乏しく空しく憾みを抱く者に獨修の便利を與ふる爲め編輯せし者にて解説は專ら平易簡單なる文章を以て綴りたれば誰人にても一讀して作文の秘法を悟入し得べき古今無比の寶冊子なり請ふ愛讀あれ

第壹號目次

作文指南●作文に從事する心得。文章と學ぶの益●文則●文法解説○篇法章法句法字法其他作文法則に係はる條項五八件○文例一則●文談●三大家文話○讀文法數章○復文法三章●字解●實字○虚字○助字○故事○難語○俗語●雜録●八家文論○作文佳言○古文纂評○文評語類○文法論一篇○雜話數件●附録●詩法獨學(四月廿日發行)

右作文指南の見本れ入用の向ハ郵劵十錢封入して御申込あるべし御注文は前金の外一切發送不仕候(府內ハ此限にあらぜ)尚又た御照會にハ必ぞ郵便往復端書を御用ひ可被下候

發兌所 東京芝區西久保櫻川町八番地 文々社

大賣捌 東京本鄕弓町壹丁目廿番地 女學雜誌社

●演説著作材料新誌第三號

本月廿日發兌 壹冊定價十錢

目録●社説○雄辯と自由の時世に長ぜ●學海珠玉○數字の知識外十七件●文壇一枝○田圃の肥料外拾四件●人事瑣談○知友甚だ寡し外十二件●名章華言○諫、好、學、用、支、疑、薦、詩、學、才、校、緩、苛、醜、美、心、力、奇計外詩歌等に關そる華言其外名章廿四條●雜録新話○日本數學畧史外七件●諸廣告●全國無遞送料●毎月一冊發兌見本ハ十錢郵便切手送る者に呈す

發行所 女學雜誌社

●論題日本婦人改良論

本誌第壹號鬪文の高點者ハ左の三名とす

●甲點者(賞 女學雜誌卅冊分無代價呈上) 福島 三育生

●乙點者(賞同 廿冊分無代價呈上) 横濱 木村是

●丙點者(賞同 十冊分無代價呈上) 東京 若宮銀次郎

鬪文は次號の附録として御覽に入れ可申候

●看客諸君に報告す

前號報告の通り弊社今般活版器械を新設仕り候に付き彼此れ混雜にて十五日發行の分意外に遲刊に相成り候に付即ち本號ハ廿五日發行に改正致し候間此段御承知可被下候尚ほ次回よりハ印刷場整頓仕り候に付必ず定期より發行可仕候是亦た併せて豫告致し候也

女學雜誌社

●解約公告

小生事熟談の上文學叢誌の編輯は第拾號限り解約致し候間此後ハ文學叢誌社に關係無之候此段社外諸君に公告す

近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 (大賣捌) 巖々堂

東京神田區雉子町 團々社支店

同 神田區佐柄木町 東海堂

同 日本橋區新葭町 巨明堂

同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂

同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂

同 京橋區銀座二丁目 山口福松

同 本鄕區元富士町 盛春堂

同 本鄕區春木町二丁目 解明堂

同 牛込區肴町 活神堂

大坂備後町四丁目 岡島支店

東京芝西久保櫻川町 (支局) 萬春堂

發行所

本局 東京本鄕區弓町壹丁目廿番地 女學雜誌社

持主兼印刷人 瀧田正義

編輯人 近藤賢三

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY